

● 近畿短歌大会講演

表現の味わい — オノマトペを中心に

河野裕子

(かわの ゆうこ)

平成十一年三月十三日、奈良市「ならまちセンター」で開催した近畿短歌大会の講演の再録です。オノマトペとは、私たちも日常よく使っている言葉です。意味や理屈ではなく、どんと体で感じる言葉です。今回はその楽しさを味わってみましょう。

* オノマトペとは

オノマトペというのはあまり聞いたことがない方もいらっしゃるかもしれませんが、日本語で書きますと、擬声語・擬音語、あるいは擬態語などと言うことができます。

例えば犬がワンワン鳴いたり、風がそよそよ吹いたり、猫がニャアニャア鳴いたり、そういうような「ワンワン」とか「そよそよ」「ニャンニャン」とかいう言葉がオノマトペです。私は短歌を作るときに、オノマ

トペを使うととてもたのしいのです。オノマトペというのは、直接、体を通して表現するおもしろさがある、その場が生き生きする。オノマトペを使うおもしろさがあるような味わいを出してくるのか、作品をあげながらお話をしたいと思います。

例えば、ホオジロの声を「一筆啓上仕り候」、あるいはホトトギスの声を「特許許可局」「てっぺんかけたか」、あるいは「ほっちゃんかけたか」というふうに聞くということが日本では古来からあるのですが、こ

ういうふうに興味付けをしながら聞くことを「聞き做し」というふうに言います。鳥の声などを意味付けながら聞き做す脳というのは、日本人だけが特殊に持っているものらしいんです。それは日本語が単音で意味を作ることができる言語だから、聞き做しができるそうであります。

例えば「あいいうえお」という母音を考えてみますと、「あ」の場合は、鳥の「鴉カ」ですし、「い」は井戸の「井」、「う」は卵の「卵」、「絵」は絵画の「絵」、「お」はしっぽの「尾」というふうに、単音でもちゃんと意味ができますね。だから音を聞きながら、いつも意味付けながら聞いているというところがあるらしいのです。

* ふくろうの声のオノマトペ

郊外の霧深みかも今鳴くはほろすけほうほう鼻のこゑ

という歌が小泉千樫にあります。ちょっと読んだだけでは意味がわかりにくいですね。「郊外の霧深みかも」は郊外の霧が深いからという意味になります。郊外の霧が深いから、「ほろすけほうほう」とフクロウが鳴



いている、その感じを歌っているわけであります。フクロウの声を「ほろすけほうほう ほろすけほうほう」と聞いているのですね。

「ほろすけほう心ほほけてごろすけほうしんじつ」とし「ごろすけほう 岡野弘彦

一首の中に三回もオノマトベが入ってきます。岡野弘彦さんは、よほどこのふくろの「ほろすけほう」という鳴き方が気に入ったのでしょう。

「ごろすけほう心ほほけてごろすけほう」と言いながら、かつ、フクロウ自身が「ごろすけほう」と、自分の声をおもしろがって鳴いているんだよ、というふうに作って

いる。その声を聞いている岡野弘彦さん自身も「しんじつ」とし、「ああ、いとしいなあ」と思っている、鳥の声を懐かしみながら、味わって聞いているのですね。

病める子よきみが名附くるごろさんごろさんのしきり啼く夜ぞゴロスケホウツホウ

宮柊二は「ゴロスケホウツホウ」というふう聞いています。宮柊二が竹やぶの近くのうちに住んでいた頃の歌です。子供が小さくて病気をしていたのですが、竹やぶで鳴いているフクロウの声をこう聞いているのです。その子供がフクロウに「ごろさん」というあだ名を付けるのですね。

この歌は「ゴロスケホウツホウ」というオノマトベだけではなくて、「ごろさん」というようなニックネーム、懐かしみのある言葉が出てくるところがおもしろいのですね。フクロウの歌三首あげてみましたけれども、こういう歌を読んでいると、フクロウという鳥が昔から人の暮らしの近くにいて、そして人々がこの鳥を親しく懐かしみながら鳴き声を聞いていたのだ、ということがよくわかると思います。

*ハトの声のオノマトベ

次はハトの歌のオノマトベを紹介します。雉鳩のほうほうほろと鳴くこ糸に冬の曇りは繭いとこもりたり 影山一男

キジバトというハトはあちこちにおりまして、その声も私たちはよく聞いているのですが、声を意識して聞くことはないような気がします。歌にしたときに影山さんはキジバトの声を「ほうほうほろ ほうほうほろ」というふうに聞いているのですね。これもいい歌で「冬の曇りは繭いとこもりたり」という下の句によって、オノマトベがさらに立ち上がってきます。

冬の、曇天の日なんですけれど、そういう日は繭いとの中に入ってしまったような、寂しい、懐かしい気持ちがあります。そういうときにキジバトの声が「ほうほうほろ」と聞こえた。キジバトの声を、ものやわらかく、くぐもるような形で表現したい歌ではないかと思いました。

同じくハトのオノマトベですけれども、土鳩はどどつぽどどつぽいば茨いば咲く野はねむたくてどどつぽどどつぽ 河野裕子

「土鳩」はツチバトのことです。これは私の作品です。昭和四十年代の末頃、東京に五年ばかり暮らししました。私は田舎で育った人間ですので、東京暮らしがいやで仕方ありませんでした。そういうときに田舎の懐かしい、野山の歌をたくさん作ったようです。その中で私はハトの声を思い出して「どどつぽどどつぽ」というふうにしたのです。

茨の咲く五月頃の、人のいない明るくてのんびりした野原の中でドバトがなっている。なぜ「どどつぽ」というオノマトペになったのかと考えているのですが、「土鳩」ということばの「ド」の濁音が、「どどつぽ」の「ど」を連想させたのではないかと思えます。音とか言葉というものは、すぐ近くにある音や言葉から引つ張られながら作りだされるところがあります。そういうふうには私はドバトの歌を作ったのです。こういう歌は、絵本なんかの挿絵に付けてみるとおもしろいのではないかと思っているわけです。

ハトの歌で、どうしても入れておきたい歌があります。こういう歌であります。

ツチヤクンクウフクと鳴きし山鳩はこそ
のこと今はこそ遠し 土屋文明

「ツチヤクンクウフク」を片仮名で書いてあります。そして作者は土屋文明であります。「こそ」というのは去年のことですね。「こそのこと今はこそ遠し」。これも大変おもしろい歌で、読んだ時に思わず笑ってしまったのですが、漢字で書けば「土屋君空腹」なんですね。ハトが「腹減った、腹減った」と鳴くわけです。

この歌は昭和二十一年に作られております。終戦の翌年ですね。土屋文明はご承知のように群馬に疎開いたしました。開墾生活をしていたのです。また、こういう歌も作っています。

稀に來て鳴く山鳩め権さんの畑は掘らず
吾が畑を掘る

「稀に來て」、「たまに來て鳴く山鳩のやつめ」というのですね。「ごんさん」というのは人の名前です。「ごんさんの畑は掘らず我が畑を掘る」。「ハトポッポが来るのはいいけれども、ごんさんの畑は掘らないで、自分の畑ばかりほじくり返して豆を食べてしまっんだ、ええ、憎たらしい」という歌で

すね。もう一つ、

この度はこちらも覚悟を新にし食ふなら
食へと数多く蒔く

「食われるほうは先を見越してたくさん種を蒔いておくんだよ」、そういう歌を前後に挟んで、今申し上げました「ツチヤクンクウフク」という歌が出てくる。歌としても大変おもしろく、また、聞き做しのオノマトペという形から言ってもおもしろい歌だと思えます。さらに言えば、ヤマバトの声が「クウフク」というふうに関こえたということも、戦後の空腹の時代であることを思い合わせますと、納得のいく歌であり、切実に時代というものを写しながら表現を選んでいることがよくわかる例ではないかと思うのです。

* 茂吉の歌とわたし

次にもう少し、違った形のオノマトペを申し上げようと思います。

斎藤茂吉もたくさんオノマトペを使っております。私は、中学生の頃から短歌を作り始めたのですが、斎藤茂吉の歌は若い時には、地味な渋い歌であまりよくわから

なかったのです。

斎藤茂吉の歌のよさが少しはわかるようになりかけてきたのが、三十代半ば過ぎくらいの時です。斎藤茂吉の歌を読んで「ああ歌っていうものはこういうものかな」と思ったんですね。私は「コスモス短歌会」に入って、もう亡くなられましたが、宮柊二先生のところで短歌を作っていましたけれども、歌会に出ることはほとんどなかったのです。好き勝手にやっております、訓練や習練という時間が短かったような気がします。そういう私でしたが、三十代の半ば過ぎたころから斎藤茂吉の歌のよさがやつとわかりかけてきました。そのきっかけは岡井隆さんに「遙かなる斎藤茂吉」という本を頂いたことです。私は岡井さんの『遙かなる斎藤茂吉』を読んで、短歌は細



かく読まなければだめなんだよということ

を教えられたような気がしました。それまでは若さの勢いにまかせて無我夢中で歌を作っていたのですが、細かく短歌を読む、ということを教えられて、斎藤茂吉の歌を細かく丁寧に読んでみて、歌は丁寧に読まなければいけないし、一字一字を大切に作らなければいけないものなんだ、ということに気がついたのです。

何でもないこと、例えば空が曇っていて、鳥が一羽、その空を過っていく、ただそのことを歌の五七五七七の中で表現してみると、すごくおもしろい世界ができてくる。何の事件も大事も言っているわけではありませんが、細かく「てにをは」を使い分けながら三十一字の中でまとめて作り上げられた世界というものは、目で見た世界よりも、もっと不思議なおもしろい味わいのある世界を見せてくれるんだな、ということ

がわかってきました。

*** 茂吉の「しんしん」**
それで茂吉のオノマトベ「しんしん」について、三首お話をしようかと思えます。

茂吉は「しんしん」とか「ざんざん」とか「さらさら」とか、普通のオノマトベを使った時に、非常にうまい、いい歌を作るのではないかと選んでみました。斎藤茂吉の使っているオノマトベはそんなに特異なものはありません。

ほがらほがらのぼりし月の下びにはさ霧のうごく夜の最上川 斎藤茂吉

『白き山』という歌集にあります。この歌の中で使われているオノマトベは「ほがらほがら」ですが、大変ゆつくりした豊かな感じがします。これは『古今集』に先例があります。日本人は古くから「ほがらほがら」なんておもしろいオノマトベを持っていたのです。茂吉はこういう変わったオノマトベも使いますが、大体は、そんなにとつびなオノマトベを使いません。「しんしん」が多いんですね。私がちよっと調べた限りでもたくさん目につきました。

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞こゆる

いちばん有名な歌はこれだと思います。教科書に載っていますから、多くの方はご存じだと思っております。



第一歌集『赤光』の大変格調高い歌です。死に近い母親を詠んだ一連の作品がありますが、その中の一首です。この中にもう一首あります。「のど赤き玄鳥つばくらめふたつ屋梁はりにゐる足乳たらちねの母は死にたまふなり」。これも教科書に載っていて有名です。

さて、「しんしんと」というオノマトペなのですが、死期の近い母に添い寝をしている。ちょうど田植えの時期なのでしょうか、たくさんのカエルが、があがあ鳴くのですね。実際はうるさいカエルなのですが、茂

吉は「しんしんと」というオノマトペを使っている。この歌の場合「しんしん」がしっくりするわけです。いつもうるさく聞こえるカワズの声だけれども、天まで聞こえるほど、しんしんと聞こえるのだという。これは耳で聞いた「しんしん」ではなくて、心のどこかで聞いた音かもしれませぬ。精神の震えが摺すりんだ言葉であったのだろうと思ふんです。「しんしん」は「しんしんと夜が更ける」とか「しんしんと雪が降る」とか、よく使われるオノマトペですが、茂吉がこういうふうに使ってみますと、また違った表情で歌が立ち上がってきます。

畑はたゆけばしんしんと光降りしきり黒き蟋蟀せみの目にみえぬころ

これも大変不思議な歌です。畑を行くとしんしんと秋の光が降りしきっている。そして黒いコオロギは目が見えないんだよという。秋の光が澄み通っているのですが、それを「しんしんと光降りしきり」。「しんしん」がありますから「しきり」がうまく効きますね。「し」という「イ」母音は静かな感じがします。「し」を三回使っています。このように「イ」母音の使い方もうま

いのですが、下の句の「黒き蟋蟀の目にみえぬころ」がとてもおもしろい。光がしんしんと降りしきっている昼間に、この黒いコオロギは目が見えないんだよ、といっているわけで、理屈を離れた不思議なおもしろい歌だと思えます。もう一首、

しんしんと雪ふるなかにたたずめる馬の眼まなこはまたたきにけり

平凡な「しんしん」という言葉を使ってもうひとつおもしろい世界を出していく。それは大変力量があることなのですが、そういう力技が、茂吉ならできるのですね。私たちは「しんしんと雪降る」なんて使って、後がうまくいきません。ところが茂吉は「馬の眼はまたたきにけり」を持ってきて、「しんしん」を落ち着かせます。斎藤茂吉の「しんしん」は決して珍しい場面で使っているのではなく、みんなが使うようなオノマトペを使いながら、説得力のある歌を作っているのですね。

*使い方の変なオノマトペ

次は金子兜太さんの俳句です。

三日月がめそめそといる米の飯

「めそめそ」というオノマトベは「めそめそ泣く」とか「めそめそするな」とか使いは大体きまつているのですが、これを「三日月がめそめそしている」と三日月にくっつけ、さらに米の飯にも掛かるように使っています。用例にはずれた、とんでもないところに「めそめそ」をくつつける。そういうオノマトベの使い方もあるという例で紹介したいと思います。これは三日月の掛かっている晩、めそめそ泣きたいようなことがあって、飯をかつこんでいるんでしょうね。「めそめそ」と平仮名で書いてあるところがおもしろいのです。

在りざまのぐわーんと広き男心を愛し
てまた人と別れぬ 佐佐木幸綱

「男心」というのは男の心。「ぐわーん」と書いてありますが、「がーん」でしょうか。そういう響きは鐘の音とかに使うのですが、広い男の心という場面で使うのは、思い切った使い方だと思います。

考えないでキャッチする言葉としては、私はオノマトベがいちばん力を発揮するのではないかと思うのです。普通考えられないようなところにオノマトベをぶつけてみ

る。力業、配分の仕方、あるいは飛躍力のおもしろさ、そういうものが、金子兜太さんや佐佐木幸綱さんの俳句や歌の中にはあるのです。

わがうちをぎらありぎり光りつつ人ま
ろがゆき家持がすぐ 岡井隆

「わがうちをぎらありぎり」と平仮名で書いています。「人まろ」というのは柿本人麻呂です。家持は大伴家持ですね。平仮名の使い方がおもしろいのです。「人まろ」と柿本人麻呂をわざわざ「人」だけ漢字にして「まろ」は平仮名で書いている。そのく

せ家持は漢字で書いてある。使い分けをしているのです。短歌は耳から聞く文芸でもあります。目で読んだときにもおもしろいという作り方をしています。「ぎらありぎり」は光りながら行く人麻呂や家持に掛かるはずですね。文脈はそうなんです。けれども、この歌は、光っているのは人麻呂であり家持でありながら、さらに岡井隆という歌人の野心、矜持ではないかというふうにも読めるのです。つまり歌人としての岡井隆は、歌聖といわれた柿本人麻呂や万葉集の編纂をした大歌人、大伴家持を常に

意識していて、彼らが自分の中をぎらありぎりで行くのです。決しておれは負けないよと、そこまで読めてしまう。オノマトベの脂ぎった、したたかな感じがする歌の作り方です。また「人まろがゆき家持がすぐ」で「人まろがゆき家持がゆく」ではありません。細かい計算がしてあります。「家持」は全部漢字です。これは結句を「やかもち」と平仮名で書くと、歌がしまらないからです。漢字で書くことによって結句を締め、目で見える歌のおもしろさを計算しているのです。

*おもしろいオノマトベ

もう一首、斎藤茂吉の歌をあげます。
『月影』という最後の歌集にあります。斎藤茂吉には『赤光』と『白き山』に二つの頂点があるように言われておりますが、私はこのごろ『赤光』や『白き山』よりも『つきかげ』がおもしろいのです。

『つきかげ』は、斎藤茂吉が身体的にだめになり、神経のほうも衰えた頃の作品のようですが、歌を作る時は頭にちゃんと歌のスイッチが入ったらしいんですね。そうい

う時の歌集ですが、ただこと歌ふうの、日常をぞつた何でもない歌が私にはおもしろいのです。その中からオノマトペということ、孫を歌った歌をあげてみたいと思います。

ぶらぶらになることありてわが孫の齋藤
茂一路しげいち上のぼりをあるく 齋藤茂吉

「ぶらぶら」というオノマトペですが、「ぶらぶら」とか「ぶらぶら」とかはよく聞くのですが、「ぶらぶら」はどういう場面で使うか思いつきません。この歌が、けつたいでおかしい感じがするのは、もう何と言ってもこの「ぶらぶら」のせいです。

これを丁寧にみますと「ぶらぶらのわが孫齋藤茂一」と作ると、そんなにおもしろくないのです。「なることありて」がおもしろいのです。つまり「孫の齋藤茂一はしょっちゅうぶらぶらなのではなくて、ときどきぶらぶらになる」、そこがおもしろいのです。茂吉はどこから自分の孫を眺めているのでしょうか。茂一がやってきました。時々、茂一がぶらぶらつとするんですね。そしてまたまともになつて、またぶらぶらつとします。「ぶらぶらになることありて」と言われ

ると、わかつたような見たような変な気がします。そういうおもしろさがうまく出ていて、意味や、場面としてはすぐ答えることはできませんが、何かおもしろいのですね。オノマトペというのは、意味を超えた、意味以上のおもしろい味を出してくれる。

理屈でものを見ないで、ぱつとキヤッチする。ぱつとキヤッチしておもしろいと思つたものを理屈で表現するとおもしろくなくなってしまう。そういうときには、オノマトペを使うのです。気迫というか、計算外というか、体で掴むというか、それがオノマトペのいちばんのおもしろさではないかと思ひます。

* 永井陽子のオノマトペ

永井陽子さんという方は、私より少し若く、現実をちよつと離れながら、不思議な空間を作つていく、歌のうまい方です。

べくべからべくべかりべしべきべけれす
ずかけ並木来る鼓笛隊

お気づきの方もあるかと思いますが、このオノマトペ「べくべからべくべかりべしべきべけれ」、これは助動詞「べし」の活用



の応用編です。助動詞「べし」の活用は「○・べく・べし・べき・べけれ・○」という形で活用するのですが、活用は「べく」「べし」「べき」「べけれ」。活用には「べかり」と「べかり」と「べかり」です。永井陽子さんは、それらをこの中に放りこんで、オノマトペのおもしろい世界を作っています。こういう活用による言葉の自律運動をキヤッチする音感と言語感覚は、大したものだと思います。この歌も、よく計算をして作っています。まず「べくべからべくべかりべしべきべけれ」では、鼓笛隊の折り目正しい

リズム感のある動きが見えてきます。「すずかけ」と風通しのいい言葉も選びます。また「並木来る」がうまいんですね。「並木」というのは遠近法の感じ、見通しのいい感じになります。並木によって、向こうのほうから鼓笛隊がやって来る、という構図になり、動きを出しながら一首を作り上げている。

こういうオノマトペは永井陽子さんの発明で、他の人が使うとすぐ真似したことがわかりますから、一回しか使えない言葉です。「めそめそ」や「しーん」や「しんしん」のような言葉は応用が効くのですが、「べくべから」は永井さん専用です。

*河野裕子のオノマトペ

君を打ち子を打ち灼けるごとき掌よさん
さんばらんと髪とき眠る 河野裕子
連れ合いを殴って、子供も殴って、手が灼けるように熱い。えーい構うものかと、髪の毛をさんさんばらんといて寝てしまった、という大変暴力的な歌。

この歌は三十代の初め頃作りましたが、その頃は生活があまりうまくいきませんでした

した。連れ合いが企業を退職して大学に帰り、子供がまだ三歳と一歳。無給で三軒長屋に暮らして、もうろくなことがないわけです。そういう時に私は、歌ぐらいいは景気のいい歌を作ろうと思いました。あれから二十年たつて自分の歌がわかったような気がします。それは「さんさんばらん」のところですよ。

この歌を読んだ人は、河野裕子という人は大変行動的で暴力的ではあるが、意地悪ではないと思われたのではないかと。それは「さんさんばらん」に秘密があると思います。「ざ」は「ア」母音ですね。「ん」はぎゅつと縮まっています。「ざ・ん・ざ・ん・は・ら・ん」と「あ」と「ん」が「あ・ん・あ・ん・あ・ん」と繰り返されることによつて、大きな落差を生みながら、ダイナミックな感情を作っている。そのダイナミズムが、或る気分のよき、明るさ、開放的な感じをこの歌に与えたのではないかと気がついたのです。

*表現の味わい

最後に「表現の味わい」についてお話を

したいと思えます。「表現の味わい」は難しく、一概に言うことはできません。佐藤佐太郎にこういう歌があります。

夕光ゆふかりのなかにまぶしく花みちてしだれ桜
は輝かがやを垂る

これは昭和四十年代に京都の二条城のしだれ桜を見て佐藤佐太郎が作った歌です。

私は短歌の表現について思う時、この歌がまず頭に浮かんでくるのです。この歌の結句の「輝を垂る」という表現。しだれ桜が夕光の中に輝きながら、咲き垂れている。それを「輝を垂る」という表現で佐太郎は作っているのですが、私たちなら「しだれ桜は輝きてをり」と作ってしまうでしょう。「輝きてをり」も「輝を垂る」も意味的には全く同じですが、歌の感じが違ってきました。「てをり」と「を垂る」の三字の差異。歌の奥行きやふくらみを作るといふのは、このように細かい言葉の使い方によるものなのです。

今日は「表現の味わい」ということでオノマトペを使った歌をたくさんあげながらお話をさせていただきました。